

なんだよ！なんだよ！亜丁ってこんなところだったの！？あまりに強欲と思える宿の女将への反発心から沖古寺を飛び出してきた私は、身体の前足をザックに挟まれた格好で荷物に埋もれながら、半ばヤケクソになってズンズン歩いていた。天国のように美しい自然の懐に抱かれた秘密の桃源郷、素朴で穏やかなチベット族の人たちとの和やかな交流。長い道のりを再訪の喜びと期待に胸を膨らませてやってきた私が、心におもい描いていたそんな甘い亜丁のイメージはあっさりと打ち砕かれてしまっていた。

公共の輸送手段すらない僻地の山奥にありながら、その自然の美しさに惹かれて集まってくる旅行者を相手に、すっかり観光ずれした様子の村人達の姿……。人に連れられて全てを他人に任せていた三年前の旅では知りえなかった、この土地の現実の姿を到着早々見せ付けられた私は、懐かしい友人と思っていた人間からいきなり罵声を浴びせられたような気分になっていた。

「あつま(頭)、くるよねえ～！！」

表面上はことさら元気に振舞いわざと勢いよく歩きながらも、つい先ほどまで喜びに弾んでいた胸の中には、やり場のない怒りと失望と悲しみが重苦しく渦を巻いていた。

こんなに美しい土地なのに……。何故？……

前夜、稻城の温泉宿で、私は亜丁がどんなに美しい場所なのか熱心にアーロン達に語ったものだ。海子が大好きだというウィンは目を輝かせ、自然を愛するアーロンもシャオチンも亜丁来訪をとっても楽しみにやってきたのだ。

みんなもガッカリしてるんだろうな……。泣きたいような気分だったが、今ここでその事について深くは考えたくなかった。亜丁の旅はまだ始まったばかりだし、前から見ても後ろから見てもザックに手足が生えた様な私の姿は、シリアスになるには滑稽すぎる。洛絨牛場ルオロンの方向から馬に跨り折り返してくる中国人の旅行者達が、みんな私の姿を見ると指差して笑っていた。

「小姐、あんた力持ちだねえ～！！」

馬上で笑いながら呆れた様子で声をかけてくる旅行者達に、私はことさらに明るく振舞い「そうよ！私にとって強い女なの！」と腕を振り上げ、何度も力瘤を作って見せているうちに、だんだん自分でもこの状況が可笑しくなってきた。先ほどの重苦しい気分は少しずつ和らいできた。

まったく私ったら何をやっているのだろう。皆が軽装で馬に跨り気楽に観光旅行している場所で意地になって大荷物を担いで歩き、今日がこの先どうなるのか、何処に泊

まれるのかも判らない。思いがけない亜丁の住民たちの洗礼には大きく失望を感じたが、それだけが亜丁のすべてでは無いはずだ。とにかく私はここまで来ているのだ。嫌な出来事をグジグジ考えているよりはこれからの旅の展開に期待したい。

出発前はとて一人で持ち運ぶのは難しいだろうと思われていた荷物も、怒りの勢いに任せて担いでみれば案外担げるものだった。私は自分で思っていた以上に遅しかったらしい。結局こうなるなら最初からポーターなんて雇わなければよかった。それならさっきのような嫌な思いもしないで済んだかもしれないのに。

多少のお金をケチって意地を張り苦労しているのも馬鹿らしいが、そんなバカバカしさが私の旅の持ち味なのはいつもの事だ。自分のこの遅しさがどこか誇らしくも感じられていた。この時の私は軽装で楽々通り過ぎて行く馬上の旅行者達を横目で見ながら、心の中で密かに「フン！私はあんた達とは違うのよ」という何の根拠もなく、誰も羨ましくない優越感のようなものもコソコソ感じていたが、実はこの旅の始まりである四姑娘山での私は、ポーターに荷物を持たせ自分は馬に跨っていたのだ。

あの時はやや年かさの母や母の友人一同との登山ツアーのような形をとっていた旅行だったため、自ら選択した状況では無いと言い訳できない事も無かったが、事実は事実であり人間の気持ちなんてその時々で変化するまったくいい加減なものなのだ。

それまで一緒に歩いていたアーロン達は、私が大丈夫そうなのを見届けるともうそれには気を留めることも無く、あちこちに移動しながら亜丁の湿原の美しさをカメラで写しまくり始めた。水のある風景が大好きだというウィンは湿原の中を流れる綺麗な小川を見ると、「あの水に触りたい」と道から低い崖を下って湿原に降りて行き、それぞれバラバラに歩き始めていた。みんなは自由に亜丁の自然を満喫していたが、私は動きまわるには荷物が重すぎて、ただ黙々と荷物を担いで歩くだけだ。

ゆっくりと移り変わっていく風景はどれも見覚えがありとても懐かしい。その中でも特に印象深かった、山全体にゴツゴツと尖った岩が天にむかってぎっしりと聳えている異様な姿の岩山が近づいてきた。まるで鬼の住処のようなのだ。昔話に出てくる鬼ヶ島ってきっとこんなじゃ……と思えてくるような荒々しい山容だ。長年気にはなりつつもまだ実際に訪れる機会に恵まれていない、中国雲南省の石林とはこの山の風景がもっと範囲を広げた様な感じなのではないだろうか。

道の脇に立っていた道標に書かれていた名称は忘れてしまったが、この山にはたしか日本語でいう「五百羅漢」のような意味合いの名前が付けられていた。岩山の上にぎっしりと聳えている石柱を僧侶の集まっている様子に見立てているのだろう。普通ならこの岩山だけでも観光名所になってしまえるくらいの見ごたえと存在感、その不思議な山容が形成されるに至るまでの地質学的な興味など十分な魅力にあふれていて、変った形の石や岩を眺めるのが好きな私は、三年前も今回もこの岩山には大いに興味が惹かれたが、周りにいる旅行者達は誰も問題にしていない様子だ。

帰国した後にそれとなくインターネットでも調べてみたが、亜丁旅行記を書いている人の中にもこの岩山について触れている人はいないようだった。雲南省といえば誰もが石林、石林と騒いで一大観光地になっているというのに、亜丁は雪山ばかりがクローズアップされて、この鬼ヶ島山が全く注目されていないのは岩山好きの私としては大変遺憾だ。

風景を懐かしみながら緩やかな上り坂を一步一步踏みしめゆっくり歩いていたが、次第に前後に抱えている荷物の重さが肩に食い込みはじめ、私の歩く速度は徐々にスピードが落ちてきていた。最初のうちは怒りのエネルギーをパワーに代えてズンズン歩いていたのだが、その怒りが静まってしまうと、ひたすら荷物の重さが身にしみてくる。

いつの間にかアーロン達はずっと先へ行ってしまい、後ろからはウィンが追いついてきた。

ウィンはそう体力がある方ではないらしく、軽装で歩いているながらもやはり大分疲れているようだった。考えてみれば今朝は3時半に起床して、食事は早朝、亜丁の入り口で小さなお椀に麺を一杯食べただけなのだ。既に時刻は午後をだいぶ回っていて、疲れてくるのも無理はない。それに加えて高地では下界に比べて体力の消耗が激しいのだ。

牛場までの道のりも中盤を過ぎてからは、ウィンと二人で10分歩いては少し休み、15分歩いては腰掛けて休憩しながらノロノロと歩いていた。

高度4000メートルの土地では既に夏も終わりの季節になっているとはいえ、一応まだ8月だ。日中はお天気さえ良ければやっぱり暑い。下界より太陽に近い分だけ、尚更暑いような気がしてくる。太陽がジリジリと照りつける中、重い荷物を背中に背負いながら胸にも抱いて、ひたすら歯を食いしばり黙々と歩いた。洛絨牛場まではもうそう遠くはない筈だが、なにしろ二人の歩みが遅いのでその距離はなかなか縮まらないのだ。

ふう～

道の脇に腰掛けるのにちょうど手ごろな岩があり、私は胸にかけていたザックを降ろすと、背負った荷物はそのままだに岩の上に腰掛けた。私が腰掛ければ背中の中のザックは自然と岩の上に置かれた状態になるため重さは感じなくなるし、ザックをわざわざ肩から外して下ろすのも面倒なほどグッタリしていた。

私達の目の前をガラガラ、シャンシャンとカウベルや鈴の派手な音を立てながら旅行者を乗せた騎馬隊が通りすぎて行く。馬1頭に対して1人付き添っている馬子達は、まだ小さい子供から大人からまで年齢性別さまざまだ。自然の厳しい亜丁の観光シーズンはそう長くはないのだろう。稼ぎの間は家族総出で借り出されているのに違いない。私は水を飲みながら、目の前を通り過ぎていく騎馬隊の団をボンヤリ眺めていた。疲れのあまり、頭の中はカラっぽになっていた。

そんな時である。騎馬隊に付き添って歩いている馬子達の中に、少年と呼ぶには少し大人になりすぎているような年頃の青年が混じっていたのがフと目に入った。何気なく青年の横顔に目をやった私は、その瞬間頭の中にピリッと電気が走ったような気がして、何故だか急に彼から目が離せなくなってしまったのだ。

「……………」

食い入るように彼の横顔を見つめている私の視線に気付いた青年はキョトンとすると、不思議そうな顔をして私を見返し「何？」と言いたげな表情で小首を傾げて見せたが、私は凍りついたようにジッと彼の顔を凝視し続けていた。

騎馬隊の団はにぎやかな音をたてて、ゆっくりと私の前を通り過ぎていく。落ち着かない様子で何度か私の方に目線を向けていた青年も私の前を通り過ぎて行った。彼がこちらに背を向けて歩き去って行こうとしても、私は青年の姿から目をそらすことが出来ずにいると、やはり何故自分が見つめられていたのか気になっていたらしい青年が再びチラッと後ろを振り返った。

その瞬間私は自分でも気付かないうちに大声を出していた。

「ちょっと待って!!!」

青年はビックリしたように立ち止まるとこちらを振り向いた。

「あなた、ちょっとこっちに来て!!あなたの名前は何か?」

この時の私はきっととっても怖い顔をしていたに違いない。青年は戸惑ったような表情を浮かべながら2、3歩私の方に近づいてくると、自分の名前を答えようとしながら私の顔を見つめ、次の瞬間ハッとした様子で

「……アッ!!」と叫んだのだった。

(次号に続く)